

サンングラハ心理学研究所設立趣意書

(一九九二年一月八日)

サンングラハ心理学研究所主幹 岡野守也

(創刊一〇〇号に際し、出発点の再確認という意味で第一号所収の設立趣意書を掲載することにしました。現時点での状況や変更については「」囲みで註を入れました。)

天が下のすべての事には季節があり、
すべてのわざには時がある。
生まるるに時があり、死ぬるに時があり、
植えるに時があり、植えたものを抜くに時があり、
殺すに時があり、いやすに時があり、
こわすに時があり、建てるに時があり……。

(旧約聖書『伝道の書』三・一〜三)

ここ七、八年、あるいはもっと昔から、私の思想的な歩みにさまざまなかたちで関わってくださったみなさん、私は、昨年あたりから思うところがありいろいろ考えてきましたが、一つの時が来たのかもしれないと感じ、これまでスタッフであったC+Fワークショップから組織的には独立し(協力関係は維持します)、「サンングラハ心理学研究所」を設立することを思いました。そこで、お知らせ・協力へのお願いとして、趣意書をお手元にお届けします。

サンングラハ心理学研究所の目的

この「サンングラハ心理学研究所」を通じて、私が目指したことは、これまでもいろいろなかたちでみなさんに申し上げてきましたが、あらためていえば、以下のようなことです。

◇どうしたら、人間すべてが、自分自身とも他者とも自然とも調和した、「仲よく楽しく生きて楽に死ぬ」ことができるような生き方に到達できるか、徹底的な探究を試みることに。
◇そのためには、近代的な理性・科学主義、個人主義、ヒューマニズムは不十分であり、霊性と理性の統合、自己実現から自己超越へという意味での〈意識の変容〉が必要条件——十分条件ではない——だと思われるので、そのための理論と方法とそしてなによりも実践そのものを探究すること。

◇その時その時に到達した探究の成果を、自己絶対化するこ

となく仮説・試案・提案といったかたちで、しかしやはり広く社会に提示していくこと。

◇そのことよって、人類の全体的変容―サヴァイバルになら、これからの努力を持続していく所存です。」

「→右の目的については、ある程度接近―実現することができたと思っています。とはいっても、「人類の全体的変容―サヴァイバル」はもちろん、「日本の全体的変容―サヴァイバル」もまだまだ遠い到達目標ですが、それは一個人や一組織でやること、できることではありません。きつと、コスモス的になるようになる、なるべきならなる、ということだと思いが、これからの努力を持続していく所存です。」

なぜ、「ホリスティック心理学」か

「ホリスティック心理学」という呼称は、他に使われている方があったので、ご存知のとおり現在には使用せず、サングラハ独自のプログラムを「コスモス・セラピー」と呼んでいます。これも、サングラハで提供しているプログラムすべてをカバーしていないので、どうしたものか考えています。ウィルバーの「統合心理学 (Integral Psychology)」の借用も考えましたが、彼ほどインテグラルではないし、唯識―仏教に強く焦点を当てていますし……まだ結論が出ていません。」

では、なぜ「ホリスティック心理学」かということですが、これはまず個人的には、私自身の内部ではすでにまとまった

ものになっている、キリスト教、禅・唯識を中心とした仏教、クリシュナムルティ、エコロジイ的思想、トランスパーソナル心理学…などのエッセンス（詳細については、拙著『トランスパーソナル心理学』『唯識の心理学』『美しき菩薩・イエス』青土社、『テーマは「意識の変容」』春秋社などを参照）が、別々ではなく一つのものであるという社会的イメージを作っていくために選んだ言葉です。

これは、もちろんそれだけに限定されるわけではなく、学びの深まり、広がりにしたがってやがては、一方では心理学のさまざまな潮流の成果をさらに吸収し、もう一方では、神道、道教、ユダヤ教、ヒンドゥー教、イスラム教、さまざまなタイプのシャーマニズムなどなどのエッセンスをも包括できるものにしていきたいと思っています。

そうした、これまでおよびこれからの探究の方向性を、「全体論的」「包括的」「統合的」といった意味をこめて「ホリスティック」と呼んだわけです。「全体」という日本語のイメージがひじょうにかたく、かつ戦前の全体主義を思い出させるところがあり、かといって他に適当な日本語が見つからなかったこと、すでに日本に存在し、活動しているホリスティック医学やホリスティック教育とも方向性がほぼ一致しているので、ゆるやかな協力関係をもっていきたいと思っていることなどの理由で、あえてカタカナにしました。

また、人間性にどちらかという心・人格という側面から

アプローチし、かつセラピー・修行という心理臨床的な実践を重視する、そしてどこまでも追試―反論―修正といった科学的な手続きが可能なオープン・システムであろうとするといった意味で、ひとまず「心理学」としました。従来のいわゆる「心理学」からははみでる部分も多々あることはもちろんで、精神科学／霊学 (science of spirit) とか魂の科学 (science of soul) などと呼ぶこともできるのでしょうが、現代日本の情況のなかではひじょうにいかがわしい感じになってしまっているので、意識的に避けました。

トランスパーソナルとの関係

これは「トランスパーソナル心理学の日本の発展」というふうなイメージ作りをしてもよかったのかもかもしれませんし、「トランスパーソナル心理学研究所」にしてはという意見もありましたし、私自身それは相当考えてきました。しかしそうすると、どうしても本家であるアメリカのトランスパーソナル心理学関係者の傾向（理論、セラピー技法だけでなく、ライフスタイル、雰囲気、さらにはファッションまで）にある種拘束される、「トランスパーソナル」というネーミング自体、心のトランスパーソナルな領域にのみ焦点を当てている、変性意識・超常体験志向が強すぎるというイメージがぬぐえないという欠点があるといった理由で、いわば一種のイメージ戦略として、あえて私個人としては変更することにしました。

これはもちろん、日本で今後もトランスパーソナルというネーミングで続けていかれる方たちの活動を否定するものでも、情況に応じた協力関係を拒否するものでもありません。

「C＋F研究所やトランスパーソナル学会、トランスパーソナル精神医学・心理学会等とは、決して対立関係になったわけではありませんが、政治に関する志向の違いが主な理由で、このところおつきあいは疎遠になっています。」

組織の性格づけについて

本研究所は、ソフト（精神的な実質）の面でいうと、まず個人の研究・執筆の広報、講義・ワークショップの組織としてスタートさせますが、もし可能なら、志を共有できる方たちとの出会い・学び合いの場に発展させていきたいと思っています。

現段階では、私の自宅を連絡事務所としますが、活動が十分な質量の支持をえることができるようならば、いざれハード（施設・建物など）も調べていきます。「↑ようやく藤沢ミーティング・ルームを借りて維持することができるところまできています。これからできればもう少し規模拡大をしたいと願っているところです。」

こうしたスタイルには、一人でやっている間はともかく、支持してくださる方が増えれば増えるだけ、これまでのさまざまな精神的な運動にしばしば見られた、ただ一人の絶対化

された指導者とその追従者のピラミッド型集団という、きわめて陳腐で不毛な形に陥る危険があることは十分承知のうえです。しかしまた、私としては形式的民主主義・合議制の空虚さというもう一つの問題にもすつかりうんざりしていますので、あえてこうしたスタイルでしばらくやってみることにしました。「↑幸いにして、不毛なことになっていない（と本人は思っています）」ので、まだ、もう少ししばらくこれで行こうと思っ

ています。みなさんのご意見はいかがでしょう。」
また、十分なソフト（人材、理念、理論、方法など）の足らないままハードだけが準備された場合、ハード維持の自己目的化やハードをめぐる利権争いによって、いかに墮落していくか、さまざまな精神的な運動でこれまたうんざりするほど見てきましたので、あえてハードは実質が熟してくるまで無理をしないで後回しすることにしたわけです。

本組織は、もちろん理想的には「自立した個人の連帯から生まれてくる自然な秩序」をめざすもので、当面は「出入り自由のゆるやかなネットワーキング」といった感じの組織にしたいと思っています。

（*なおこれは、ひとまず期間を二年と限り、社会的需要があればさらに持続し、ないようであれば中止するつもりの実験的な試みです）（↑幸い十六年以上持続することができました。）

趣旨に賛同いただける方の、協力・参加を心からお願致します。

具体的な形について

一 会員制と会費

会員は、当初一年目は、会報等の手紙による連絡を受け取るのみの「連絡会員」、他の会員との交流を望む「交流会員」（ただし、手紙、電話、面談等のどこまでか名簿に意志表示する（↑これは実行できていませんが、今後、実行したいと思っています））の二種とし、機が熟するようなら研究所のハードを含む発展・維持の一部責任を分担する「維持会員」も設ける（↑現在六名の維持会員がおられます）。また会員と別に「研究所講師」を設ける。

入会については、試行期間中は連絡会員は基本的に無条件、交流会員は主幹の判断とし、期間後は交流会員と主幹の合議によって再検討する。また講師は主幹の指名とする。

交流会員になった以後は、半年ごとに自由意志で連絡会員、交流会員、維持会員のいずれにも変更できる。（↑これは事務手続きの簡略化のため一年ごとになっています。）

会費は連絡会員は年三〇〇〇円（↑現在は五〇〇〇円）、交流会員は月三〇〇〇円とし（↑現在は月一〇〇〇円以上で年度初めに自己決定）、維持会員制ができた際は、月五〇〇〇円以上の自己決定とする（↑これで実行しています）。会費未納の場合は、ハガキで一回のみ確認し、連絡がなければ自動退

会とする〔未納のお知らせを同封した会報を数回送付し、連絡がなければ自動退会扱いとしています。〕。

なお会計事務の負担を避けるため、今年一年は、会計は非公開とし、主幹の裁量に任せていただきたいと思います(↑このままで続けさせていただいています。おかげさまで若干の赤字が累積している、しかし、現在より広い事務所を借りるにはやや心もとない、といった状態です)。

(*二年以内で機が熟していくようでしたら、都内での事務所開設を検討したいと思っています)。(↑二年半前、藤沢でようやく実現しましたが、講座に集まってくださる人数が徐々に増えており、かなり手狭になっています。できれば、より広いところに移りたいと願っています。ご協力よろしくお願ひ致します。)

二 活動

研究所独自の活動としては、今年は

● 年一、二回の合宿ワークショップ(一回は五月頃、関西、奈良興福寺での「唯識心理学ワークショップ」を予定、その他希望者は、八月三〇日、九州佐世保の曹洞宗護国寺主催の「唯識心理学ワークショップ」にも参加可能)

(↑しっかりと持続してきましたが、このところ、主幹の多忙と加齢のため、回数が少なくなっています。しかし、可能なかぎり持続していきます。)

● 会報の発行(隔月、年六回)(↑おかげさまで百号です。)

● 主幹、講師の執筆・講演活動の広報(会報に掲載)

希望者へのコピー、テープの頒布

● 会員相互の自発的・ネットワーキング的な活動

〔まさに自発的にこうした活動をしていただきたいと願ってききましたが、会員のみなさんにはいろいろ遠慮やためらい、その他事情があたりだったのか、ほとんど行なわれてきていないようです。これから、どうすればいいか、みなさんと一緒に検討していきたいと思っています。〕

これが一つのポイントになると思いますが、心理的・地理的に近い会員相互で意志を確認しあつて、会報、講義テープなどを媒介にしたミーティング、日常的な電話シェアリングなどを行なつてはどうかと思います。その場合、通常のグループ、サークル活動と違う点、「義理や人情に流されないで、いやなことはいやと言つていい」「参加したくない場合は、はっきり断つてかまわない」という拒否権、「聞いた話はその場だけにとどめる」という守秘義務、「生きる責任は自分で負うしかない」「共感するが巻き込まれない」というシェアリングの姿勢、の三つの原則を守つてやつていくことが大切だと思います。